

ドマーキ語の動詞による名詞修飾と「定動詞」

吉岡 乾

(国立民族学博物館／総合研究大学院大学)

本発表ではフィールドデータに基づき、ドマーキ語で主節の述語として一般的に用いられる「定動詞」形式を一覧し、その中の直説法の単純過去形がそのまま名詞修飾にも用いられることを示す。そして、形態統語的特徴などから、以下二点を論じる。① ドマーキ語と同じ語派の言語にはこうした修飾用法がないか、類似構造があっても修飾可能な底の名詞の種類が接近可能性階層の上位に限られている点と、より近距離で話されている別系統の言語のほうが、類似構造でドマーキ語と同じくらい広く修飾できる点から、地域特徴であると言える。② この「完結分詞」が単独で述語としても機能することに関して、当該形式が人称で活用し、コピュラの有無で時制・相を変える点、併存する関係節構造が随分と異なった操作を求める点などを踏まえ、三人称の自動詞単純過去形を突破口に修飾用法が生じた可能性がある。一方で通言語的な「定動詞」の定義の緩さが、結論を曇らせる。

1. ドマーキ語

ドマーキ語 (ISO 639-3: dmk) は、印欧語族インド・イラン語派のインド・アーリヤ (IA) 語派中央グループに属する危機言語である。日用する話者数は多く見積もっても 100 人以下で、パキスタンのギルギット・バルティスタン州フンザ県フンザ谷モミナバード村 (図 1 で西の点)、ゴジャール谷シシカト村 (北東)、ナゲル県ナゲル谷大ナゲル町ベディシャル地区 (南) の三地点にのみ話者が確認できている。いずれの地点も、周囲を完全にブルシャスキー語に包囲されていて、全話者がバイ/マルチリングルである。

典型的には、主に接尾辞を用いる膠着的性質の強い分裂能格言語 (完結相で三人称のみ能格 A) である。語順は SV/AOV を好み、形容詞修飾は Adj-N を好む。文脈が支持する情報の語句は言わなくても良い。



図 1. ドマーキ語の使用地域

2. ドマーキ語の述語の活用

ドマーキ語の述語は動詞かコピュラかが担う。コピュラは動詞の下位カテゴリで、活用体系が動詞とは異なる。動詞の活用接尾辞は四つのセットがあり、表 1 に示す通り、直説法未完結相、直説法完結相自動詞、直説法完結相他動詞、並びに接続法で使い分ける。各セットが、人称・数・性で更に六～七つの形式を持つ。接続法は主に、一人称の意志・勧誘 hortative、二人称への命令 imperative、三人称への希求 optative/jussive に用いられる。従属節でも直説法が用いられる。

コピュラは現在形と過去形とがあり、現在形には表 1 の直説法完結相自動詞セットが用いられる。過去形は、現在形に、動詞では非現実 irrealis を表す標識 -aka を付加する。活用表を表 2 に示す。

動詞の直説法で区別される時制+相は、これらの一致接尾辞のセットの使い分けと、補助コピュラの有無や時制で表し分けられる。補助コピュラが用いられた場合に、動詞の語末が縮約するものもある (表 3 の「眠る」参照)。相は接尾辞の他に、動詞によっては語幹の変形でも表すが、その対応ルールは今のところ不明瞭である。表 3 に示すのは、六種の時制+相の構成と、活用の実例である。

表 1. 動詞の一致接尾辞

	IND.IPFV		IND.PFV.INTR		IND.PFV.TR		SBJN	
	SG	PL	SG	PL	SG	PL	SG	PL
1	-aas	-aam	-is	-oom	-im	-oom	-aam	-oom
2	-ea	-eguut	-aay	-oot	-ii	-oot	-Ø	-a
3M	-ega	-eje	-a	-e	-in	-inee	-oo	-on
3F	-egi		-i					

表 2. コピュラの活用形一覧

	現在 (PRS)		過去 (PST)	
	SG	PL	SG	PL
1	čhíis	čhóom	čhíisaka	čhóomaka
2	čháay	čhóot	čháayaka	čhóotaka
3M	čha	čhe	čháaka	čhéeka
3F	čhi		čhíika	

表 3. 直説法の六つの時制+相と一人称単数の活用例

	未来	現在	継続過去	単純過去	現在完了	過去完了
	IPFV	IPFV+COP:PRS	IPFV+COP:PST	PFV	PFV+COP:PRS	PFV+COP:PST
so- 「眠る」	sáas	sáa čhíis	sáa čhíisaka	suťis	suťi čhíis	suťi čhíisaka
maar- 「殺す」	maaráas	maaráa čhíis	maaráa čhíisaka	maarím	maarím čhíis	maarím čhíisaka

3. ドマーキ語の (形容詞・節による) 名詞修飾

ドマーキ語で名詞修飾をする要素には、形容詞、数詞、指示詞と、動詞を含む節によるものがある。

ドマーキ語の形容詞は名詞的性格が強い品詞で、性・数で屈折するものと不変化のものがある。表 4 にそれぞれの例を示す。

表 4. 性・数で変化する形容詞 (左) と変化しない形容詞 (右)

	šooná 「良い、美しい」		soč 「正しい」	
	SG	PL	SG	PL
kâm 「仕事」 M	šooná kom	šooné káma	soč kom	soč káma
khéel 「遊び」 F	šooní khéel	šooné khéeloŋ	soč khéel	soč khéeloŋ

以下、動詞的な人称活用 (人称・性・数) を「**P一致**」、形容詞的な曲用 (性・数) を「**A一致**」と呼ぶ。

動詞による名詞修飾は、元の述語が単純過去形の場合、ベースとなる節 (1a) の中から、修飾したい名詞句 (ここでは *jóto* 「少年」) を節末の述語の後ろに移すだけで作られる (1b)。関係節構造の類型 (Comrie 1981) 的に言えば、元々その名詞句があった箇所をゼロにする、空所 Gap 法である。動詞の形式は (1a・b) で同形になっていて、その点は現代日本語にも似ている。

一方、アスペクトが未完結の場合は、同じく空所法を用いるのだが、主節述語として P一致した「定動詞」(2a) ではなく、A一致する不定詞 $V\text{-in}\{a/i/e\}$ (M.SG/F.SG/PL) で修飾することとなる (2b)。

- (1) a. *jóto-n góoli kha-in* b. [*Ø góoli kha-in*] *jóto*
 少年-ERG.M.SG 食べ物 食べる-TR.3SG 食べ物 食べる-TR.3SG 少年
 「少年が食べ物を食べた」 「[食べ物を食べた] 少年」
- (2) a. *jóto góoli khá-aga* b. [*Ø góoli kha-aná*] *jóto*
 少年 食べ物 食べる-IPFV.3SG 食べ物 食べる-INF.M.SG 少年
 「少年が食べ物を食べる」 「[食べ物を食べる] 少年」

これらの他に、疑問詞を関係詞的に用いて作る関係節もあり、その場合は関係代名詞 Relative-Pronoun 法が非縮減 Non-reduction 法で修飾関係を構築することになる。それについては、§5 の例文 (6) で触れる。

本発表では、(1)に見られた動詞形の振る舞い (§4) と、その文法上の扱い方を考える (§§5~7)。主節にも修飾節にも共通して用いられるこの動詞形式が、一体何であるのか。即ち、「定動詞 (単純過去形)」なのか「形動詞 (完結分詞)」なのかを考察し、将来の参照文法記述に繋げたい。

4. この名詞修飾はどう生まれたのか

こういった、述語に用いられる動詞語形のままの名詞修飾は、同じく IA 語派中央グループのウルドゥー語では、できないものとされている。Schmidt (1999: 176, 181) は、名詞修飾のための完結/未完結分詞は、普通、*hōnā* 「なる」の完結分詞 (*hu{ā/ī/ē}*; M.SG/F/M.PL) を伴うとしている。省略は可能だが、潜在的にはある。更に、関係節ではなく分詞での修飾表現は、動作主を強調する際に用いられると萬宮 (2019: 44) は述べる。その際、動作主は属格/所有形を取り、女性は単複の区別を失う。(3) は作例。

- (3) a. *mē =nē kitāb-ē xarīd-ī* b. *mēr-ī [xarīd-ī (hu-ī)] kitāb-ē*
 私=ERG 本(F)-PL 買う-F.PL 私:POSS-F 買う-F なる:PFV-F 本(F)-PL
 「私が本 (複数) を買った」 「私の [買った] 本 (複数)」

同じく IA 語派中央グループを考えると、よりドマーキ語に近い言語であるロマニ語 (Matras 2002) やドマリ語 (Matras 2012) では、分詞を述語の一部か名詞用法にだけ用い、名詞修飾には用いない。名詞修飾には必ず、関係節を用いる。ないことの証明は難しいが、Bubeník (1998) を参照する限り、中期 IA 語のアパブランチャ語でも関係節以外での名詞修飾はなさそうである。

近隣の印欧語ではどうだろうか。例えば北西 IA 語群のパールーラー語では、単純過去形述語 (4a) と同形の動詞形式 (あるいは名詞修飾標識 =*bhaáu* を伴った形) が、S・A 項の修飾に、稀に、用いられる (4b)。但し、この言語ではそもそも、未来形・過去未完結形以外の「定動詞」が A 一致する。

- (4) a. *insáan mūr-u* b. *amazarái [mūr-u(=bhaáu)] insáan na kha-áan-u*
 ヒト 死ぬ:PFV-M.SG 獅子 死ぬ:PFV-M.SG(=ADJ) ヒト NEG 食べる-PRS-M.SG
 「ヒトが死んだ」 (作例) 「獅子は [死んだ] 人を食べない。」 (Liljegren 2016: 398)

片や、同語群のシナー語インダス・コーヒスタン方言の完結分詞 V-D-*{o/i/a}* (M.SG/F.SG/PL) は述語の一部、副動詞の一部としての用法に加え、S・A 項の修飾にも用いられる (Schmidt & Kohistani 2008)。なお、定動詞は主語に合わせて P 一致で活用するが、名詞修飾構造の分詞は主要部名詞に合わせて A 一致で曲用し、形が異なる。同じくカシミリー語の過去分詞 V-*{mut/mit/mic/maci}* (M.SG/F.SG/M.PL/F.PL; Wali & Koul 2007: 277) も、ヌーリスタン語派のカティ語の過去分詞 V-*{sti/ysti}* (M/F; Грюнберг 1980: 258–259) も、述語の一部か、S・O 項の修飾に用いられる。前者は、単独では述語にならない。

一方で、系統的には離れるが、隣接言語であるイラン語派のワヒー語 (Bashir 2012: 851) や孤立語の東ブルシャスキー語は、S・A 以外に対象 theme や所有者も分詞での修飾の底の名詞にでき (cf. 所有者 (5-EB))、接近可能性階層 (Keenan & Comrie 1977) の比較対象項以外を全てカバーしている点で、パーラー語やシナー語 (cf. 関係節修飾 (5-SH)) とは異なる。このカバー範囲の広さはドマーキ語の動詞による名詞修飾でも同じで (5-DMK)、即ち、系統よりも地域性が利いているのだと言える。

(5) SH: [kóo mušáa-y gut-ér wey gó-o-s] óo mušáa 《関》 N-R
 誰:M 男-GEN.SG 家-DAT.SG 水 行く:PFV-3M.SG-PST その:M.SG 男

EB: [há-al-ar chil gi-m] sis 《分》
 家-LOC-DAT 水 入る-ADJ 人

DMK: [gar-ás-yu paaní peleet-á] maniš 《分?》
 家-INS.SG-DAT 水 溢れる-INTR.3M.SG 男

WB: [ámen-e há-al-a cel giyi-m dulú-m] ne ses 《関》 R-P
 誰-GEN 家-LOC-DAT 水 入る-ADJ COP:3Y.SG-NPRS その:HM 人

「[(そいつ_{REL}の) 家に水が流入した] (その) 男」

しかし、ではこの地域特徴が、ドマーキ語、ブルシャスキー語、ワヒー語のどこから広まったのかは分からない。中央 IA 語がその特徴を有しないのは見た通りだし、例えば西ブルシャスキー語も持たない (5-WB)。ワヒー語の近縁であるシュグニー語も、分詞での修飾は、形容分詞による S・A 項修飾くらいしかない: *tīc-in yāc* 「歩いている少女」【歩く-ADJ.PTCP 少女】(Edelman & Dodykhudoeva 2012: 801)。

5. 完結分詞は単純過去形の定動詞なのか

さて、例文 (1ab) に見られた動詞形式は単純過去形の「定動詞」で、それを形動詞としても使っているのだろうか。そもそも印欧語研究は、まず「定動詞はある」からスタートする嫌いがある。

主語項で P 一致し、述語になる形式なので、この形式は定動詞っぽい。主語は分裂能格で標示、もちろんアスペクトも示していて、一般的な定動詞節の要件 (Givón 2016: 273) にも合致する。定動詞で名詞を修飾するのは、関係節の述部が定動詞である言語での関係修飾では普通に見られる。だがドマーキ語の関係修飾 (6) は、関係詞と汎用接続詞 =taとを併用して、関係代名詞法か非縮減法で作る。ここから (1b, 5-DMK) のような修飾構造にするには、その両方を落とさなければならない。

(6) *the-ii* [kó-ok amé-c minéeni peg-á]=ta hey khaš
 打つ-CP 誰-INDF.SG.M 我々-INS.PL 下へ 倒れる:PFV-INTR.3SG.M=CONJ それ.M 屠殺
ir-ii, hey-éy móos khá-am ir-inée, aamá móos
 する-CP それ.M-GEN.SG 肉 食べる-IPFV.1PL する-TR.3PL 生の.M 肉

「『殴り合いをして [倒れた] 者を屠殺して、そいつの肉を生で食おう』と、彼らは言った」

しかも、未完結相でも同様に関係節を用いた修飾が可能なのに、その一方で、完結相で可能なシンプルな修飾法が、並行的に可能となっていないのは何故なのか、このストーリーでは説明ができない。

6. 単純過去形の定動詞は完結分詞なのか

では、例文 (1) の動詞形式は完結分詞という「形動詞」で、それを定動詞としても使っているのか。形動詞の述語使用は色々な言語に見受けられる。例えばいわゆるアルタイ系言語 (7~9) で広く見ら

れるが、人称一致をしないか、所有人称一致をするのがお決まりのように見受けられる。

- (7) ツングース語族 ナーナイ語 (風間 2012: 142) : 人称一致なし

tai nai tutu-i / tutu-xən
 その 人 走る-ANNF.PRS 走る-ANNF.PST 「その人は 走る／走った」

- (8) モンゴル語族 シネヘン・ブリヤート語 (山越 2006: 156) : 人称一致なし

tede usegelder ɔɔi tereen-de apiraas x-ee
 3PL:NOM 昨日 晩 それ-DAT 手術:INDF する-VN.IPFV
 「彼らは昨夜、彼の手術を (担当) しました」

- (9) チュルク語族 サハ語 (江畑 2013: 18) : 所有人称一致

bil-er-im / bil-er-bit / bil-er-e
 知る-PTCP.PRS-1SG.POSS 知る-PTCP.PRS-1PL.POSS 知る-PTCP.PRS-3SG.POSS
 「私は／私たちは／彼は 知っていた」

トルコ語の例 (10) では、同じ TAM 標識が定動詞にも形動詞にも用いられていて、一人称単数だけだと表記上は同じに見えるのだが、前者は人称一致、後者は所有人称一致で、きっちり区別がされている。

- (10) チュルク語族 トルコ語 (竹内 1970) : 未来 -EcEk

1SG: *ben yazacáğım* 「私は書く」 vs. *benin yazacağım* 「私の書く～」(表記上どちらも *yazacağım*)
 2SG: *sen yazacaksın* 「君が書く」 vs. *senin yazacağın* 「君の書く～」

サハ語やトルコ語の所有人称一致というのは、主語が基本形から所有形に変化したウルドゥー語 (3) の例にも共通する。但し、ドマーキ語の動詞による名詞修飾の場合は、項の格交替などを伴う必要がない。

通時的に見ると、現代 IA 語は古代 IA 語の過去定動詞をほぼ受け継いでいない (カラーシャ語・コワール語を除く)。中期 IA 語で伝統的過去形を完全に喪失し、受動過去分詞 (具格主語) が過去「定動詞」となった^④からである (Bubeník 1996: 100) : 例えばウルドゥー語 *kīyā* 「した」、*huā* 「なった」 < 前期アパブランシャ語 *kaya, hūva* < パーリ語 *kata, bhūta* < 古サンスクリット語 *kṛta, bhūta*。但し同時に、受動過去分詞+コピュラ定形での複合的 時制+相 も中期語以前より引き継いでいる。

それを考えると、ロシア語の過去形 -л/ла/ло/ли (M/F/N/PL) も明らかに分詞の定動詞化である。これは、通時的に東スラヴ諸語でコピュラが消失したためだ。東スラヴ以外の言語例と共に (11) に示す。

- (11) 印欧語族 スラヴ諸語 「私 (男/女) が読んだ」 (一部、三谷 2016 を参照)

ロシア語: *я читал / читала* 【чита-л/ла || 読む-PST】
 古東スラヴ語: (*язь*) *юсмь читаль / юсмь читала* 【юсмь чита-ль/ла || COP:1SG 読む-PST.PTCP】
 ポーランド語: (*ja*) *czytałem / czytałam* 【czyta-ł/ła-em || 読む-PST-COP:1SG】
 スロヴェニア語: (*jaz*) *čital sem / čitala sem* 【čita-л/ла sem || 読む-PST.PTCP COP:1SG】

しかしドマーキ語 (や他の現代 IA 語) の場合、コピュラ助動詞を伴うか否かで時制+相が区別されている。そういう環境で、ロシア語のようにコピュラが消失して分詞が定動詞になった (そして再びコピュラ助動詞が導入された) と看做すのは、やや難がありそうだ。

ウルドゥー語 (3) の完結分詞みたいに単独使用か複合使用かで変化形の数が多少増減したところで、それは「限定的な人称拡張」(Masica 1991: 260–261) か、複合での縮約 (表 3) かに過ぎず、アルタイ系

言語のように、文法的には分詞のままではないのか⑧。例えばサラエキー語 (12) は、ウルドゥー語とは異なり、述語としての単独使用でも、コピュラを伴った複合使用でも、完結分詞 V- $\{\bar{a}/\bar{i}/\bar{e}/iy\bar{a}\}$ (M.SG/F.SG/M.PL/F.PL) が女性の数の中和を起こさず、一般形容詞と同じだけの変化形を示す。但しそれでも、シナー語と同様、分詞部分はA一致、コピュラ部分はP一致となっている。

(12) 北西インド語群 サラエキー語 (Bashir & Connors 2019: 399–400)

単純過去 *gāiyā* 「彼女らは行った」 vs. 現在完了 *gāiyā ěn* 「彼女らは行っている」

一方で、隣の東ブルシャスキー語も完結相なら分詞、未完結相なら不定詞で名詞修飾をするが、動詞の準動詞形は基本的に、主語／第一項では、人称変化をしない。

だがドマーキ語の「完結分詞」はきっちりとP一致をする。A一致ではなく、分詞より定性が高そうだ。ドマーキ語は、④の由来を今でも引き摺っているのかも知れないが、分詞にもなり切れず(P一致)、定動詞にもなり切れていない(修飾用法)のは、中期語からの時代差を考えると、やはり不思議である。

7. そもそも定動詞とは何なのか

更に言えば、北西端 IA 語群 (いわゆる「ダルド語群」) は、動作主を表すために中期 IA 語の具格代名詞接語を、その新たな「過去定動詞」の人称接辞へと再統合化 *resynthesisation* した経緯もある。北西端語群と系統こそやや違うが、ドマーキ語の完結相他動詞人称接尾辞は、同系のドマリ語・ロマニ語の過去他動詞一致接尾辞と同様、部分的にそれに由来している可能性が高い (表 5)。こうなると P 一致し、「定動詞」らしい。一方でアパブランシャ語から派生した中央語群は、独立形具格代名詞から能格後置詞を発展させたので、A 一致を保ったまま、⑥「分詞」のままでも、問題がなかったと言えそうである。

表 5. 中期語の具格人称代名詞接語と、ドマーキ語の近縁・近隣現代 IA 語の人称接辞

		1SG	2SG	3SG	1PL	2PL	3PL	
AMG	PRON.INS	=me	=te	=se	=ne	=bhe	=se	Bubenik & Paranjape (1996)
RM	PFV	-em	-jan	-jas	-jam	-e(n)	-e(n)	角 (2018)
DMR	TR.PST	-om	-or	-os	-ěn	-ěs	-e(d)	Matras (2012)
DMK	TR.PFV	-im	-ii	-in	-oom	-oot	-inee	
SH	IPFV	-am	-ee	-ey	-on	-at	-an	
PLL	PERS	-um	-ar	-a	-ĳia	-at	-an	Liljegren (2016)
KSH	ERG.PERS	-m	-th	-n	-∅	-vi	-kh	

自動詞の接尾辞の方は、ロマニ語やドマリ語などに類似物が見られず、北西端語群から借用したものと思われる (表 6)。由来は不明だが、アショーク・プラークリット語辺りで点過去 *preterite* となった古代語の s-アオリストが関係しているのだろうか。セット間の貸し借り (パラダイム平準化) も窺える。

表 6. 近隣現代 IA 語の人称接辞と、ドマーキ語の完結相自動詞人称接辞

		1SG	2SG	3SG.M	3SG.F	1PL	2PL	3PL	
KSH	ABS.PERS	-us/-as	-ukh/-akh	-u	-i	-i/-a	-iv/-avi	-i/-a	
BS	PERS	-s	-e	-e	-i	-es	-en	-en	Ramaswami (1982)
SH	(INTR.)PFV	-us/-is	-oe/-iee	-u	-i	-es	-et	-e	
DMK	INTR.PFV	-is	-aay	-a	-i	-oom	-oot	-e	

ドマーキ語の完結相動詞は、P一致をしていて形態的に「定動詞」っぽい。けれども自動詞の場合（表1）、三人称の活用はA一致の曲用（表4）と並行的でもある。その類似性から自動詞完結「定動詞」＝分詞が、他のIA語に多くは見られない、**形動詞的な名詞修飾用法も獲得した**とは考えられないだろうか。そして類推から、それが他動詞にも適用されたと考えられなくはない。（⇒地域特徴へ？）

他方で、同様にP一致し、三人称だけなら末尾がA一致に似ているにもかかわらず、未完結定動詞に名詞修飾用法はない。それなのに複合時制の前部要素としてその動詞形式を使用しており、まるで分詞である。そういったアスペクト間の非対称性も考慮に入れると、**未完結相述語と完結相述語とで定動詞性に差がある**③ということになりそうだ。片や、準動詞でも、（一般の形容詞と同様に）未完結の名詞修飾に使われる不定詞は名詞に転換するが、完結分詞は名詞にはならず、**準動詞性にも差がある**④。

主に印欧語の研究だと、定動詞か準動詞かは排他的に語られる。恰も③定動詞性と④準動詞性とが同軸上にあるようだが、果たしてそうなのだろうか。そもそも、言語によって、「らしさ」が形態的尺度と統語的尺度との混ぜこぜだったり、どちらかに偏重していたりする中、対照しても良いのだろうか。

《謝辞》 本研究にあたっては、JSPS 科研費 JK15H05380 からの支援を受けている。

《略号一覧》 ADJ 形容詞{化/的} / AMG アルダマーガディー語 / ANNF 形・名・動詞形 / Bs ブロクスカト語 / CONJ 接続詞 / CP 接続分詞 / DMK ドマーキ語 / DMR ドマリ語 / EB 東ブルジャスキー語 / HM ヒト男性クラス / KSH カシミリー語 / NPRS 非現在法 / PERS 人称の / PLL パールーラー語 / PRON 代名詞的 / RM 標準ロマニ語 / SH シナー語 / VN 形動詞 / WB 西ブルジャスキー語 / Y 抽象物クラス（※他はLGR通り）

《参考文献》 Bashir, Elena. 2012. Wakhi. In Gernot Windfuhr (ed.) *The Iranian languages*. London / New York: Routledge. 825–862. / Bashir, Elena & Thomas J. Connors. 2019. *A Descriptive Grammar of Hindko, Panjabi, and Saraiki*. s.l.: De Gruyter Mouton. / Bubenik, Vít. 1996. *The Structure and Development of the Middle Indo-Aryan Dialects*. Delhi: Mptilal Banarsidass. / Bubenik, Vít. 1998. *A Historical Syntax of Late Middle Indo-Aryan (Apabhraṃśa)*. Amsterdam / Philadelphia: John Benjamins. / Bubenik, Vít & Chitra Paranjape. 1996. Development of Pronominal Systems from Apabhraṃśa to New-Indo-Aryan. *Indo-Iranian Journal* 39: 111–132. / Comrie, Bernard. 1981. *Language universals and linguistic typology: Syntax and morphology*. Oxford: Basil Blackwell. / 江畑冬生. 2013. 「サハ語の動詞屈折形式とその統語機能」, 『北方言語研究』3: 11–23. / Edelman, D. (Joy) I. & Leila R. Dodykhudoeva. 2012. Shughni. In Gernot Windfuhr (ed.) *The Iranian languages*. London / New York: Routledge. 797–824. / Givón, T. 2016. Nominalization and re-finitization. In Claudine Chamoreau & Zarina Estrada-Fernández (eds.) *Finiteness and Nominalization*. Amsterdam / Philadelphia: John Benjamins. 271–296. / Грюнберг, А.Л. 1980. *Язык Каму*. Москва: Издательство «Наука». / 風間伸次郎. 2012. 「アルタイ型言語における準動詞と言いさしについて」, 『北方言語研究』1: 139–162. / Keenan, Edward L. & Bernard Comrie. 1977. Noun phrase accessibility and universal grammar. *Linguistic inquiry* 8: 63–99. / Liljegren, Henrik. 2016. *A grammar of Palula*. Berlin: Language Science Press. / 萬宮健策. 2019. 「ウルドゥー語の否定、形容詞と連体修飾複文」, 『語学研究所論集』23: 39–47. / Masica, Colin P. 1991. *The Indo-Aryan languages*. Cambridge: Cambridge University Press. / Matras, Yaron. 2002. *Romani: A linguistic introduction*. Cambridge: Cambridge University Press. / Matras, Yaron. 2012. *A Grammar of Domari*. Berlin / Boston: De Gruyter Mouton. / 三谷恵子. 2016. 『比較で読みとくスラヴ語のしくみ』. 東京: 白水社. / Ramaswami, N. 1984. *Brokskat Grammar*. Mysore: Central Institute of Indian Languages. / Schumidt, Ruth Laila. 1999. *Urdu: An Essential Grammar*. London / New York: Routledge. / Schmidt, Ruth Laila & Razwal Kohistani. 2008. *A grammar of the Shina language of Indus Kohistan*. Wiesbaden: Harrassowitz Verlag. / 角悠介. 2018. 『ニューエクスプレス ロマ（ジプシー）語』. 東京: 白水社. / 竹内和夫. 1970. 『トルコ語文法入門』. 東京: 大学書林. / Wali, Kashi & Omkar N. Koul. 2007. *Kashmiri*. London / New York: Routledge. / 山越康裕. 2006. 「シネヘン・ブリヤート語テキスト: 日常会話を題材にした基本文例集」, 『環北太平洋の言語』13: 139–180.